

明治33年ごろ、まちの旦那衆がお金を出し合い「弁天座」という芝居小屋を造った。

昭和3年に一度火災で焼けたが、すぐ再建した。香南地域の各所では前ぶれの三次さんが、太鼓や鐘をたたきながら演目をふれまわった。

その後を追いかける子どもたちの姿。毎日のように大衆演劇や映画などが興行され、芝居がはねた後は人の波がざわざわと絶えなかった。

弁天座周辺は地元を問わず、若い人の遊び場だった。



山崎須美子さん(赤岡町)所有の弁天座写真  
現存する写真は少ない。

しかし、映画館の増加やテレビの普及、時代の流れに客足が遠のき、弁天座は衰退していった。営業が廃止され、昭和45年の台風では屋根が飛んだ。娯楽の発信源だった「弁天座」。

その当時の思い出をお聞きしました。



前ぶれの三次さん(浜口茂富さん)  
「弁天座で……がございませう」と  
当時、まちを練り歩いた。



株主に与えられる  
「弁天座の小屋元」  
これを持って行くと  
タダで芝居が見られた。

### 式 弁天座の思い出



弁天座の裏に住む  
竹内猛さん(69歳)

ピョンと拍子木が跳ねると  
飛んでいきよった

戦争で都市部の芝居小屋が焼け、残っていた弁天座のような地方の芝居小屋に、有名な役者や歌手がたくさん来た。不滅の剣士スター片岡知恵蔵や高田浩吉、演歌歌手の田端義夫など有名な歌手、役者はみんな弁天座に訪れ、娯楽は戦後の暗い時代に、大きな生きる力を与えた。

子どもたちは弁天座で寝泊まりしていた役者が楽屋で自炊している姿を塀の上から、こっそり覗いた。  
昭和28年ごろは近所の子どもをタダで劇場に入らせてくれた良い時代だった。  
弁天座での思い出の作品は、映画「宮本武蔵」。

新しくできた弁天座も昔の弁天座のように、にぎやかで活気のある市民の交流の場所になってほしいと思う。



赤岡町で薬屋を営む  
山本春水さん(81歳)  
千鶴さん(79歳)

お手洗いが  
臭かったことを  
一番覚えちゆう

弁天通りは昔のメイン通り。名物興行師のはるさん(山崎晴海さん)が入場券にもなったピラをうちの軒先にもつるしてくれたことを思い出す。

弁天座では宝塚出身の女優、宮城千賀子の「狸御殿」がきれいだった。この世に、こんなきれいなものがあるのかと思った。  
劇場に入ると幕があり、その幕が手あかでも汚れていた。1階は、ぼこぼこのセメントに5人が座れるくらい長い長椅子。2階が



弁天座の株主だった  
近森信夫さん(78歳)

弁天座を閉めたのは  
ワシじゃ

昭和3年の12月に弁天座が焼けた。翌年、一人が三百三十三円ずつ出し合って、芝居好きの商売人

33人が弁天座組合を作った。株主の特典はタダで興行が見れるだけだったが、それだけで十分だった。  
戦時中は検閲のため、劇場の中に警察が駐在し、不適切な内容だと芝居中も止められた。終戦後は自由になり、芝居や浪花節、活弁付きの映画が主に

行われたが、ストリップもあった。そのときの弁天座には、大人があふれかえっていた。

終戦後は劇場の興行が、数少ない楽しみのひとつだった。

2時間映画を時間差で赤岡と後免、山田の3カ所で上映したこともある。フィルムの続きを自転車で運ぶ間、観客は客席ですっと待ち続けた。不満を言う人もなく、人も時代もゆったりしよかった。  
祖母が昭和10年ごろから、弁天座でもぎりをしよった。こつこつ仕事をする人で興行師の勘定など、弁天座にはなくてはならない人だった。

やがて赤岡劇場ができ、弁天座も年々古くなり、雨漏りもするようになった。ここが潮時と感じ、株主の皆で話し合って閉館を決めた。残ったつよつよ弁天座の写真もなくなつたとき、すべてがわしの思い出の中よえ。

もぎりをしていた祖母(近森雪尾さん/写真左端)

